

浄土

九月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月十圓一日發行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別授受記録第三五二号)
昭和三十七年八月二十五日 印刷 昭和三十七年九月一日發行

第二十八卷

第九号

☆☆信仰の「泉」浄土トラクト☆☆

浄土トラクト

在家の方々の為の

村瀬秀雄著

浄土宗勤行の解説

新書版九〇頁
定価七〇〇円
送料二〇〇円

待望の書「浄土宗勤行式の解説」愈々刊行
旧版「浄土宗日常勤行式解説」を全面的に
改訂、版も持ち易い新書版として刊行

(百部以上五分引送料無料)

大正大学教授 佐藤良智著

真理のはなたば

新書版
定価七十円
送料二〇円

若き人びとにおくる仏教入門

青年会 婦人会に最適のテキスト

東京都千代田区飯田町一ノ二

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

大日方大乘著

B六判上製

三〇二頁

仏教衛生学

定価四三〇円
〒八〇

現代人の必読書

本書は衣・食・住・水・中毒の五項目にわたり、医学的見地より仏教資料を充分に駆使し、新しい分野を開拓している。人は健全な肉体と康安な精神とをもってはじめて健康であり、幸福の源泉があるのだ。ここに現代医学の学ぶべきところがある。

本書を忠実に活用してこそ仏教を現代に生かすことになる。

大日方大乘著

B六判上製三一二頁

仏教医学

定価三五〇円 八〇円

三幸出版社

東京都千代田区
飯田町 1 の21

浄土

九月号

聖道の修行は、智慧をきわめて生死をはなれ、浄土門の修行は、愚痴にかえりて、極楽にむまると

法然上人御法語



中央アジア・コータン（于闐）で発見された絵画断片。「馬」（紙本）上の文字はチベット文字

浄土 九月号 目次

表紙 月光菩薩像（奈良・東大寺）

彼岸に向って……………真野竜海（2）

実話 関東大震災……………吉野翠幹（6）

随筆 父と百万遍……………村田嘉久子（12）

教育 シリーズ 幼児の家庭教育……………笠原秀定（14）

紀行文 アメリカ旅行③……………佐藤治子（20）

近僧代 颯田本真……………大橋俊雄（28）

扉の御法語……………（19） 事を謝すれば……………（11）

表紙の写真……………（27） 国土の浄化……………（18）

教界トピック……………（15） 修行は幾年かかる……………（26）

講話 浄土宗入門 その二……………戸松啓真（30）
——浄土教の流れ——

彼岸に向って

真野 竜海

(大正大学助教授)

お彼岸の事を幼稚園児に話して聞かせた。勿論、難かしい話は分かるすべもないから、彼岸行事に因み、仏様を拝みましようという主旨の話をしました。ところが、帰宅した幼児は、お彼岸というのは、ぼたもちを食べる事だよ、と云ったそうである。しかし大人の我々として、これを笑えたものではない。お彼岸の趣旨を深く考えてみなければならぬ。

お彼岸は、私共信仰の中心である。浄土西方に向って、つまり彼岸に向って、ふだんは乱れがちの我々の心を、びったりと向ける事であります。浄土宗の名前が示すように浄土を祈念する事は最も重要な事の一つであります。

先日、ある方が来られ、突然、私に、「浄土というものは宗旨により考え方がちがいますが、——もとより私は禪

宗ではありませんが——やはり西方だけというふうに信じなければならぬのでしょうか」という問を出された。「さようです。西方だけです」と私は言下に答えました。その人はもう少し、現代的(?)な返事を期待されたのか、その質問は、それで終り、別の話に移った。このような問題は、浄土教の起源より今に到るまで絶えた事のない迷いであり疑いであり、求道者の心にかかる事であります。経験乏しく浅学な私が、このような問題を、今、説明できようと思いませんが仏教本来の心の構えを、お話しして、私の「西方だけです」という答を説明致したいと思ひます。

仏教信者は、一生、「仏教」という名の学校に入ったものと考えてよいでしょう。一般に学校に入る時、一応この学校に入れば確実な勉強が出来、人間ができると信じて入りま

す。先輩、知己、父兄の意見も聞き、自分で調べも致しますが、或は、入学後、学校騒動が起きたり、自己の志や考えと逆の教育、運営があるかも知れません。とにかく、学校を信頼し、学校のコースに乗るわけです。そのコースに従い、単位を取り、決められた通りにして進んで行くうち、学力等が高まってくる。いくら自由といっても、学校の型というか、コースにはきまらないでは、学校教育は考えられない。仏教という学校もそうです。略、初級、中級、上級と仮に分けると、初級入門は、乱れた心を極力調え仏教の教を、そのとおり受け入れ信ずる事から始まります。批判は後廻しです。第二の釈尊と云われた竜樹は、仏教修学の過程を進むには「智」を以てするのであるが、その入口は「信」であると説いています。ちょうど、日常、バスに乗るのに、大した不安もなく乗りこむようなものです。先年、叡山でバスが転落しましたが私も昨年そのコースで参拝しました。一方通行にかどうかわかりませんが、曲り角で、対向車がいるかも知れないのに、かなりのスピードで、ぐっとカーブを切るため最後方の坐席では、ふりとばされる感じで冷っとしました。又、今はよいドライブウェイのできつつある伊豆山を越えた時も、舗装のしてない路肩すれすれにバスが進み、びっくりしました。しかし、万一、ハンドルの切り損じがあるかもしれないバスに

とにかく乗る事によって目的地に着きます。

若干の不安はあるかも知れないが、まず安心な「信」のバスに乗りこんで、コースに乗る事です。身体が乗っても心が乗ってない人は、心も乗せる事です。これが初級入門です。次に、それから、ゆっくり、いろいろと教えられたり導かれたりして中級（見道）へと進む事でしよう。この中級は、どちらかというと言論的な事も多く、反面迷う事も多いとも言えます。さて、それから、爾後、仏教体现の道である長い長い一生をかけた上級（修道）へ進んで行くのです。仏教は教が身につかねば何なりません。この上級では、中級での教が、自分の心身にすり合わされて、何回も何回も反覆され、あらゆる人生経験からもまれて、仏教の本質、つまり人の本当の生き方が、段段に光輝を放ってくるわけです。光りの現われ方は千人千様ですから、仏法の常住を信じて、一人一人たゆまざる不断の年月がいります。釈尊は、仏法の戒、定慧という教の説法の中で、次のように云っておられます。

農夫には、今日芽を出させ、明日穂を伸ばし、明後日実らせる力はない。穀物は、適当な季節の変化を受けて芽を出し、穂をつけ、実るのである。汝等にも、今日か、明日か、明後日の中に、執着を離れ、煩惱の障りから解脱する

という自由の力はない。戒、定、慧を学んでいる中に、次第にその時節がくるのである。故に汝等は、常に戒と定と慧とを学ぼうと志さなければならぬ。

又足の肉を破り経行しつつ修行に猛烈にとりくむソーナに對し、

「ソーナよ、汝は琴を弾いたことがあるか」

「あります」

「琴の糸を張り過ぎたとき、美しい音色がでるか」

「いいえ、よい音色はできません」

「それでは、糸が緩みすぎているときはどうか」

「やはり、よい音はできません」

「ソーナよ、張り過ぎず、緩みすぎず、緩急よろしきを得ているときは、美しい音色がでるか」

「はい、よい音色がでます」

「ソーナよ、修行の努力も、あまり急であっては、心が張りすぎて落ちつかないし、あまり緩かであっては、心がたろんで目的を達することができない。急ぐことなく、緩むことなく、常に心の平静を保ち、中庸の努力をつづけ、道を修むべきである。」（以上、聖仏典より）

と、あせらず怠らざる修行を説法なされた。

このように、まず信ずる事によりかかって、以後常に、自分の実行努力をなし、仏法の指示する目的地向う事が、「仏教の学校」の主旨であります。しかも、長い長い努力という事のうちには、行きつ、もどりつの迷いを計算に入れての事であります。

さて大へん大まかなコースの分類でしたが、まず信を中心とする初級、理解へ進む中級、体現にふだんの努力を積む上級へと、次々に、追い上げてくるのであります。

そこで、先の浄土西方、彼岸の話しに転じます。西方浄土を云われる信者の心底の中にも、或はいろいろに去来するものがあるかも知れません。人の一生の中でも、其時其時に深い経験を重ねて、次々と意味を深く受けとめていく方もあるでしょう。しかし、多少の信仰の長短はあるにせよ、お互いに初信同然であります。先きに述べた仏教のコースにより、西方浄土の信仰の型に、まずはみる事によって徹底すれば、長い年月は、その真の意味を教えてくれるものと思われまふ。

私自身、二十年前の西方浄土と、発音した時と、今、西方浄土と述べておるのでは模様が異なるのを感じます。恰も、二

十代の死に対する感じと三十、四十年代と異なるように。とにかく私は、このような仏教のバスに安心してゆれながら乗っております。

実に人間の暮らしの中で、型・形は、逆に精神を産むものであります。心を形で示すのが作法でもあり、作法が又、心を伝え、育くむ事にもなりましょう。先日、私共の幼稚園で傷の手当を受けて、だまって立去った一園児に「ありがとう」という事について指導しました。すると、まもなく父兄から、そのような押し付けの教育はやってもらいたくない、という話があったそうです。全て上から教示されるものは押し付けであるという戦後の反動が、まだ脱しきれない人のあるのに驚いた。ありがとうとか、失礼という言葉に気のつかぬ人が目立ってきたと、此間も新聞紙上で誰かが歎いていた。云々でも口だけでは云わぬも同じと思っただけなら、大まちがいである。あの世智がらい自動車ラッシュの中でも、ドライパーたちは、道をゆずられれば、忘れずに、ありがとうのサインを出し、車は停滞なく進んで行く。ゆずった方でも、そうされれば、じゃ又、ゆずろうかという事にもなるが、もし、だまって行ったとしたら、かなり気がおさまらない事だろう。十字路で、車が一杯につきまり、どうにもならなくさせ

てしまうのは、ありがとうの出てくるようなゆずり合いの心に欠ける場合が殆どである。ありがとう、という謝意の形により、心が通り、どんどん用が運ぶのである。

定まらず又自由なるべき私共の心ですが、西方を信ずる型に托す事によって、信心が通い、行動が生じます。

彼岸、浄土に向って走る信のバスは、恰も、山頂に向うが如く、山頂が左に見えたかと思うと右に見え、道は上るとみえて下る時もあり、山頂は晴れて近くに見えたかと思えば霧雨に消えて心をとまどわせるかも知れないが、しだいしだいに高度を高めて行くことであろう。

更に、その信の力は、乗客の心に、日々に働きかけて仏と共にある喜びと強さを与えてくれる。これは、彼岸から、こちらの岸、我身、我生活に向けて放たれる光明である。この光明に生かされて、現実此岸を生ききるもの、それが、彼岸に向う人であります。

現代生活はまことに忙しい。現実以外に考える暇もなく、一段離れた所から我身を見かえす余裕もない。しかし、彼岸には、静かに、西方落日を望み、自分の越し方、行く末を、諦観したいものである。

×

×

×

実

話



関東大震災

吉野翠幹

教えてくれた。

「安政の地震から丁度七十年になる」

「天災は忘れた頃に来る」というが、たしかにその通りである。自然の偉力に威服した当時の話が記憶から薄れ、古老の数が段々に少なくなり、すべてが伝説的な世界に入りかかった頃になると、またしても同じ天災がめぐってくる。

関東大地震が起った時も同じこと、また大地のゆれがとまらぬというのに、古老が私に

地震の記録は古く日本書紀にあるそうで、中でも大きかったと思われるのに、天武天皇時代の記録がある。大地震といわれる中でも特に烈しい大地震が明応七年にあった。それから百七年たった慶長九年に大地震があった。慶長大地震から百二年たった宝永四年にこれまた古今最大とまでいわれた大地震があった。更に宝永大地震から安政大地震までは百四十七年であった。

安政大地震は、その規模の大きさと激震区域の広さからいって、関東大地震の数倍いや数十倍にあたるといわれている。即ち安政元

年七月の大地震は東海、畿内、南海等に及んで惨害を与え、同年十二月二十三、四日の兩日に亘って東海、北陸、山陽から九州にまで及び殆んど日本国中に猛威をふるった。更に翌安政二年には局地的であったが、江戸に大被害を与えた。

安政元年から数えて三十八年目の明治二十四年には美濃、尾張の大地震があり、それから更に三十三年たった大正十二年九月一日午前十一時五十八分に関東大地震が起った。そして本年は大正十二年から三十九年目にあたり、安政元年から数えれば百九年目に当る。日本地震史料の記録からみて、大地震の起るのに一応の周期が認められることになってい

例えば私は霜降りの中学校制服をきて白足袋をはいた。何故皮靴をはかずにわざわざ白足袋にしたのであろうか。おかげで避難行を開始してから間もなく跣同様になり、更に苦勞を一層大きなものにした。また飴のようになった襪をとりはずし簞笥その他の家財道具を屋外に運び出し、その上に莫蔭をかぶせ繩をかけた。同じく焼いてしまうなら、こんな手数をかける必要がなかったのである。とにかく家中を整理して、いよいよ逃げ出すことになって、裏庭の柵を破り裏通りに出た。同じ逃げ出すなら、堂々と山門をくぐってゆけばよいのに、わざわざ柵を破ってまで裏から出ることはなかった筈である。

更に後になってから笑話にもならず残念に思ったのは、私が持ち廻った荷物のことであった。つまり大きい非常用袋に書類を一ぱい詰め込んだものが私の受持った荷物であった。この大袋を背荷って歩いたので、上衣の両肩に大きな穴があいた位で、ずい分重いののであった。三日間に亘って大切に持ち廻り、やっと避難先に落ちついて開けてみた。すると中からは宝物ならぬ幾年間もの出納簿

と領収証書が出てきた。これではチリ紙にもならぬ代物だと悔んだが後の祭りであった。書類等は一切あきらめて、たとえシャツ一枚手拭一本でもよいから中に入れてあったら、後で直接に役に立ったというものであった。

さて家を後にした私たちは、ただ何んとなく多くの人たちと一諸に逃げ歩き千束町から菊屋橋へ、更に坂本を抜けて上野公園に入った。しばらく草の上に坐っていると、どこで手に入れたか、母が一袋のビスケットを持ってきた。五円を出して平身低頭で売ってもらったという母の話を聞きながら、私はもう食べ物を買えないことを知った。それどころでなく水も容易に手に入らなかった。両大師の井戸は釣瓶がこわれて汲めなくなっていた。博物館の小さな池には管理人がついていて、長い列に入って順序を待たなければ汲めないものであった。

その時分には、今の東京より更に広場がなかった。地震におびえ、火の手に追われた幾百万の人々は、東京中を渦のように歩き廻り自然と数少ない広場に蝟集していった。浅草の観音さま境内には七万、宮城前広場には三

十万、上野公園には五十万というように一ヶ所に多数の人が集ってきた。僅かの荷物を抱えて坐り込んだ人々で、上野の山は足のふみ場もない位になってしまった。これらの人々の間を縫うようにして歩く人があって、狭くとも自ずと通路ができてきた。夜に入ると、このように徬徨い歩く人々の数が次第に増した。列をなした人々が闇の中から現れ、また闇の中に消えて行った。これらの人々は途中ではぐれた自分の夫を、妻を、子供をそれぞれ探し廻っているものであった。歩きながら思い思いの名前を呼んでいた。女の声、子供の声は高くよく通った。幾千の人々の声が山に満ち、或いは遠く或いは近く木々にこだまして、一つの唸りとなって聞えた。陰にこもったこの大合唱は、とてもこの世のものと思えず鬼気迫るものがあつた。

いつの間に寝入ったのか、あたりが騒がしくなつて目が覚めた。上野駅に火がついて、山の上まで延焼するかも知れぬというのであつた。再び山の上は混乱の渦巻となつた。私達は群集の流れの中に入った。道灌山の方角に進む途中、坂町だったか八重垣町だった

か、谷中を通り抜けて間もない所で、幅の狭い道路の片側に数人の婦人が水の接待をしていた。私がご馳走になると、かすかに甘味があつてほんとに美味しかった。私はおかわりが欲しかったが、一人一杯だというので諦めた。

どこのどこやらわからぬ草むらの中で野宿して、梶棒片手の男たちに起された時には夜が明けていた。その数人の男たちは、梶棒をふるって犬猫を探すように草むらを分けていた。その内の一人が私たちの所にきていうには、いま朝鮮人を探しているので、怪我でもしない内に、ここを立ち去ってほしいということであつた。仕方なし再び上野公園にもどる途中で、谷中の墓地で余震にあい、墓石が大きくゆれる間に狭つて、どうなることかと胆を冷した。

上野公園はますます人で埋っていた。地上には名前を呼んで家人を探す人々があり、大空は黒くたちのぼる煙で覆われていた。その中で誰もが放心したように坐っていた。

夜に入ると猛火はますます烈しく、空一面を真赤に焦していた。ローマやモスコウの大

火といえど、これ程でなかったに相違ない。その内に西郷さんの銅像の方向で、騒ぎが感じられた。私もその方に行ってみると、広小路松坂屋に火が入つたのであつた。あの辺りはすでに焼け終つた筈なのに、改めて松坂屋に火が入つたのは、朝鮮人が手榴弾を投げ込んだためだというのであつた。松坂屋の窓という窓からメラメラ炎をふき出しているのを眺めながら、人々は何処の井戸に、何々の池に朝鮮人が毒物を投入したと、まことしやかに話合っていた。

夜が大部更けた頃、またしてもどよめきが起つた。今度は浅草西本願寺が焼け落ちようとしているのであつた。白熱した棟木が火の粉をふき上げながら、ドドット逆さに落ち込んでゆく姿をみていると、ここまで号音が聞えるように思われた。

その夜も明けて、三日の朝になると、さすがの業火もおさまつた。上野の山から眺めると、一望荒涼の焦土であつた。すべてのものを焼き尽し、何も残らぬ焼野原であつた。焼けるにまかせたこの大火災は、三日間四十時間間にわたって荒れ狂い、荒川区南千住から港

区芝金杉に至るまでを一なめにした。面積にすれば当時の東京市の約半分近く、戸数にして三十二万戸の全焼家屋を出した。

しかしよく見ると、はるか遠くに浅草寺だけが焼け残り厳然と立っていた。浅草の観音さまは、浅草ッ子にとっては心の糧であつただけ、大きな屋根を望見して、観音さまのご無事を知ったときは、大きな喜びというより生き返つたような元気をとりもどした。

こんな景色を眺めていると、偶然のように張物工場の若衆に会つた。この人たちは私たちを含めて懇意な人々を探しに上野にきてくれたのであつた。この人たちは早速肩からお櫃を降して、私たちにお握りをくれた。私は夢中になつてお握りを一つ掴んで、口に持つてゆくと、ブンと夥しい悪臭が鼻をついた。

昨日から持ち廻つたご飯は完全に腐っていた。しかし私は黙って食べてしまった。

私たちは、この人たちの好意で、墨田区寺島町にある分工場に避難することになった。その途中で片方の下駄を拾い、片足だけは跣の痛さから放免された。

張物工場の隣りに染物工場があり、その

雇人に若い朝鮮人がいた。彼は性質もよく評判がよかったが、その時は終日天井裏に潜んでいた。もしここに朝鮮人がいるとわかれれば、彼は恐らく殺されていたかも知れなかった。

その頃は朝鮮人問題といえは仲々の難問になっていた。朝鮮の独立運動がさかんであり不逞鮮人の暴力化問題がやかましく、毎日のように新聞紙上を賑わせていた。従って朝鮮人に対する一般人の感情はかなり悪化していた。そこにこの大天災となり、家は焼かれ、食物はなく、困ばいと飢えに苦しみ、不安に堪えかねていた人々は、つまらぬ風聞にますます神経をいらだたせた。誰いうとなく、不逞鮮人がこの天災を好機として、必ず暴動を起すだろうということが信じられた。無警察状態から自衛の手段が講じられ、各地区に自警団が組織された。私たちも夜間の警らにいた。外出する者の中には、日本刀を腰にさし、あるいは棍棒を片手に持っている者があったが、誰もさして不思議なことにも思わなかった。

白鬚橋などの大きな橋のたもとは、屈強な男が数人ビケを張っていた。帽子をかぶっ

ている者が通ると帽子を脱がせた。甚しい場合には、アイウエオと五十音を発音させた。こうして朝鮮人を探し出すというのであった。

報道機関はその機能を失った。電信電話は不通であり電気はとまった。その中で罹災者はいたずらに混乱していった。二日には東京市と府下四郡に戒厳令が布かれ、三日には戒厳地区が府下、神奈川、埼玉、千葉と拡げられた。やがて広野のような焼跡に軍隊が立哨した。夜間になると銃には剣がつけられ、静まりかえった無人の荒野にキラキラと銃剣が月光に光った。こうした軍隊の立哨をみるようになって、もう大丈夫だと人心が落ちつき始めたのであった。

その内に日本刀はもとより棍棒等の凶器を持参することが禁止された。ビケという私設の立哨もとめられた。橋の如き人通りの多い所では、これら凶器が山のように積み重ねられていた。当時、警視庁から出た告示には次のように記されていた。

「注意！」

有りもせぬ事を言触らすと、処罰されます。

朝鮮人の狂暴や、大地震が再来する、囚人が脱監したなどと言伝へて処罰されたものは多数あります。

時節柄皆様注意して下さい。

警視庁

一方救援の手が刻々に進められた。寺島地方でも四日になると、炊出しが行われた。初めて炊出しのご飯をみたとき、これはお茶飯だと思って感心したが、実は玄米であった。玄米の消化し難いものであることを初めて知った。やがて向島の土手に小屋がけができて焼芋を売った。次にはすいとんを売る店ができた。このすいとん屋は大いに歓迎され、それから久しい間繁盛していた。

寺島には私が通学する第七中学校があるがここは早速病院になった。約二ヶ月に亘って徴用されていたが、夕刻になると毎日のように棺が運び出された。食糧その他の物資はほとんど徴発されて罹災者に配当された。米国の木材を初め世界中から救護物資が集った。もし東京が復興に立上るのが早かったとしたら、それは国内はもとより各国から寄せられた温い救護のおかげであった。

こうしてその年の秋には、焼跡にボツボツ小屋が建てられたが、こうした事後処理の中で一番遅れたのは死体の整理であった。東京だけで五万八千余の死者があり、特に被服廠跡と吉原の池との大群焼死者を出した情景は酸鼻を極めた。また隅田川に浮んだ水死者は惨たんたるものであった。橋の上からみると上流にも下流にも見渡す限り蛇行した列となつて死体がつながっていた。これが上潮、引潮によつて隅田川を往復していた。中には列から離れて岸に押しつけられて腐つてゆく死体もあった。

さて中学校社会科の教科書には

「自然の災害の多くは、前もつて防ぐことがむずかしい。たとえば地震の場合は、その発生さえほとんど予知できない。しかし、その被害は家の構造をくふうすることによつて少なくすることができし、そのあとにおこりやすい火災は注意すれば防ぐことができる」と書いてある。

あれ程の大被害を蒙つた関東大震災も、「喉もと過ぎれば熱さを忘れる」である。以前は震災記念日を迎える度に、必ずすいとんを

つくつて食べたものであった。これは向島の土手であれ程美味しく喰べたものであり、あんなに元気づけられた食べ物への恩を忘れな

事を謝すれば……

(問) 浄土四月号に牧尾良海先生の中国綺談、継母の研修記の中に「人、一朝、事を謝すれば百般すべて、これを後人に聞けとかいう古い諺がありますけれど、本当にその通りで……」とありますが、これはどのような意味なのでしょう。御教示の程願ひ上げます。

尚諸先生の益々御健康であられることと浄土のご発展をお祈り申し上げます。

(静岡 望月篤司)

(答) ご質問の諺は「一たん事情が入れかわるとすべてのことは後の人に聞かないと何も判らなくなってしまう」という意味です。

つまり先妻の冷氏が亡くなり、後妻に欧陽氏がきました。ところが冷氏の性質が誠実であつたのに、欧陽氏は美しいだけで猛々しい激しい気性の持主でした。そのため夫は後妻

いたためである。ここ数年すいとんをつくらなかつたが、震災記念日をすいとんデーとし家人一同ですいとんを賞味したいと思つてい

のいいなりになり、二人の子供は毎日折檻されるという悲しい生活を送っていました。

フトしたことから後妻と先妻の魂が入れかわつて、姿こそ欧陽氏であるが魂は冷氏なので、性質はやさしく記憶や考えも先妻のそれなのです。それで部屋の中であたりを見廻して、その変わりぶりに驚きました。そして慨いて「後妻がきてからは、何もかも變つてしまつた。こうなつては後妻に聞いてみないことには、箱の中戸棚の中のこととも判らない。ほんとに古い諺の通りである」といいました。ここで「事を謝すれば」という言葉の意味が明瞭でなかつたので、お判り難かつたと思います。この場合の謝は「かわる」「とつてかわる」という意味です。謝というに字は幾つもの意味があつて、かわるの外に去る、衰える、聞き入、挨拶する、報ゆる、述べる恥入る等の意味があります。

(編集部)

父と百万遍

村田嘉久子

(元帝劇女優)

私の子供の頃、家ではよく百万遍を行いました。信心の深い父がいつも音頭取りで、其頃父も兄も義太夫の稽古をして居りまして、よく師匠が出稽古に来て居たものです。父は義太夫の節そのものより声のよいのが自慢でその声をフルに使って百万遍の音頭を取るのですから、これは父にするととても堪らない楽しさでしたらうと存じます。

冬の寒い時は室内を締め切って、火鉢などで部屋を暖ため、又夏の暑い時などはすべての障子や襖を払って広々として始めるのです。私の家は、これは品川に住む人は誰れで

も経験のある事です、道路から酒仲買問屋をして居た私の家の店へ入ると外から見ればそれが一階の訳なのですが、裏は川から海へついて居てずっと低くなって居るので、土蔵造りの家は裏の方へ行くと店の方が丁度三階位いになって居ります。

そこで百万遍をやる座敷は丁度二階位のの高さになって居るので、風通しはとてもよく廊下に面した障子を全部開けると、月夜の時などこうこうと明るくて誠に風情がありました。部屋も十畳八畳六畳と襖を取払うのですからかなり広々として感じられました。夜食

がすむと「今日は百万遍を行るよ」と父が申しますと、さあ店の番頭、若い衆、小僧に至るまで足止めをさせられて仕舞い、いやでも参加しなければならぬ有様でした。又御近所のお年寄りや、若くても信仰心のある方などは「それ松本屋の今夜は百万遍だ……」と喜んで来て下さるので、私はじめ姉妹又は兄弟が大勢居ましたから、かなりの人数になりました。

さて、この百万遍のお珠数は実に見事な大きいのが家代々のものとしてありました。普通の玉もかなりの大きさですが、ところどころにある親玉は随分大きくて、子供の私の両手に握ってものはみ出す位이었습니다。家には座敷についた仏間がありまして、父はその前に座って数取りの駒のようなものを裏返えしながら「南無阿彌陀仏」とややゆるやかに、そして長く引くような調子で第一声を始めるのです。自慢するだけあって、たしかに御念仏の音頭はうまいし綺麗な声なのです。

それに合せて何十人の人が一勢に「南無阿彌陀仏」と唱和するのですが、無論浄瑠璃できたえ上げて居る父のように、高い調子が出

る人もあり、又出ない人もありますので、この一勢に唱える御念仏の方はまちまちです。

オクターブ上の人があったり、ずっと低い人があったり……又それが愛嬌で、あっちこちでくすくす笑い声が出たり、シッシツとそれを制する声なども飛び出します。

店の番頭なども年寄りも居りますし、少し若いのも居ります。又若い血でいせいのよいのも居るし、ほんやりして居るのも居たり……小僧なぞはあんまり人数が多い時ですと、お珠数の内側の方へ入って皆の邪魔をするような恰好で繰るのです。

何十回か何百回か、ゆるやかな御念仏を唱える内、父の声が急に又高くなって、そして早間になりますと我々もそれに連れて早くなり、お珠数を繰る手も早く玉をしごくので、手の掌がすべすべになって来て、熱を持ったようにあつくなります。前に申しました親玉の大きなのが自分の手元へ廻って来ると、それをしっかりと握って誰れもがなかなか放さないのです。それは丁度自分の手の中へ親玉のお珠数が廻つて来た時に、父の南無阿弥陀仏がピタツと制止して一段落つくくと其親玉を握

つた人にはとても良い事がある、とか幸せが来るとか言ういきなりが昔からあるからなのです。

ひどいになると「なまいだぶつなまいだぶつ」早間になつて高潮して来ると、何日父の声が止るか止るかと思つて其親玉を握つて他へ廻さない人が出来て来るのです。それを又意地悪く強く引張つて自分の方へ廻させよう廻させようとするのであっちこちで何か物のつかみ合いのような工合になるので、キヤッキヤッ大変な騒ぎになるのです。親玉は普通の玉の幾つ目かに一ずつあるので、あっちこちお珠数を押さえて了つて他へやらないでがん張る人も出て来る訳です。

其賑やかな事、楽しい事、老いも若きも皆全でが、いんせない子供のようにはしゃぎ廻るのですが、私なんぞもこの親玉が丁度手の中へ来た時、父のお念仏の声が止ると、本当に幸せが来るような気がしたものでした。

こうして夜食後の三時間あまり大きな声で念仏を唱え、大勢で何も考えず楽しく過したその頃の事がいつもいつも懐しく思い出されますが、中には参加するのは嫌で、そのくせ

皆から仲間はずれにされるのも癪に障るといふような人が、「松本屋の家は幽霊が出るんだよ、毎晩のように百万遍をやつて居るじゃないか……」と言うような人が出て来て父を苦笑させた事もあります。

然し、これも私が大きくなって父から聞いた事ですが、百万遍の有難い事も無論あるが、又自分が声を聞かせたいから……などという事も表面だけの事で、何分品川の宿は昔から遊廓ですから家の近所は全部貸座敷なので、なるべくそうした所へ店の若い者が遊びになど行かないように、百万遍で縄って置くのだよ……と笑つて話して呉れた事がありました。成程な、と思つたものでした。

私も六字の御名号の有難度さは今こそはつきり知つて居りますけれど、子供の頃など只夢中で面白い遊びの一つ位にしか考へて居なかつたものでした。

大勢の人にいろいろなものをおふるまいしてお念仏を唱えさせ、悪い道へふみ込まないように店の者にそれとなく何とか防止をさせて居た父は今考へるとえらい人だったな、としみじみ思います。

幼児の

家庭教育

教育シリーズ

その二

笠原 秀 定

(明德幼稚園園長)



派に育って行くのでありましょう。この深い愛情によって、よき教育がなされてこそ本当に立派に成長して行くのであると思います。

こどもは生れてから一、二才の間は、専らお母さんのひざの上で育てられておりますが

成長するにつれて、お母さんのひざからはなれ、三才前後になると、そろそろ友達がほしくなり、友達と遊ぶようになって参ります。

然しまだ本当の友達遊びは出来ないにしても、仲間の遊んでいるのを見て喜こんでおります。そして三、四才頃になると、強く友達を求めて来るようになります、友達と一しょに遊べ

るようになってまいります。その頃になると幼稚園等の施設に入ることも出来、集団生活をよろこんで経験し、遊びのうちに、色々な面が教育され、幼稚園での教育もうけることとなります。

然し幼児の教育は、幼稚園のみではなく、幼稚園での教育は一日のうちで四、五時間で大部分は家庭での教育であり、又社会での教育であります。特に幼児の時代は、家庭教育が、最も大きな役割を占めているのでわないでしょうか。それ故に、家庭環境をととのえるということが、何より大切なことになりま

はえば立て、立てば歩めの親心、と昔からいわれておりますが、こどもに対する親の愛情というものは、本当に大きなものであります。親として、こどもが丈夫に、立派に育っていくことを望まぬものは、一人だっておりません。この愛情があればこそ、こどもは立

す。従つてお父さんお母さんの役目は非常に大きいものがあると思います。わが国では祖父母、父母、こどもと云つた家族の多い家が多いので、そこに幼児の家庭教育のむづかしさもあるようです。

私は一昨年の丁度今頃、友人と二人で欧米の幼児教育を見てまいりましたが、あちらの家庭は、父母とこどもの小家族であり、一口にいえば、相当嚴格だと思われる教育が家庭で行なわれ、又家庭においての宗教教育が徹底しているの、わが国の家庭でのこどもの教育とは大分異つてゐるということが感ぜられました。これは民主主義の進んでいることにもよると思いますが、人にめいわくになることは絶対にしてはいけないということが小さい時から育てられておりますし、又博愛といった精神が植えつけられておるようです。

ヨーロッパの人は公德心が高いといわれるのも、こうした家庭教育によるものだと思います。

教育ということは生れた時からなさねばならないことであり、又なされてゐるのでありますが、特に幼児期は、人間の性格の基礎を

つくる最も大切な時期でありますから、特に注意していかねばならないと思います。

又この時期に特にのぼしていかねばならないことも沢山あります。

その第一は、自分の力で考え、自分の力でやりとげるといふ、即ち自主性をのばすことであります。たとえば、玩具のあと片づけにしても、出来るだけこども自身がよろこんでやれるように工夫し、努力していくことが必要です。こどもにさせると時間もかかり、うまく片付かなくて、結局お母さんがやり直しをしなければならぬので、二重の手間がかかることにもなりますが、あと片付のうまいとか、へたと云うことでなくて、こども自身が行うとする、その気持や態度が大事なのであります。色々な機会をみて、自分から進んでやろうとする気持をもたせていくように努力しなければならぬと思います。

第二は、社会性をのばすことで、これは友達同志の遊びの中で、ぐんぐんのびてくるものです。そして、その友達、同じ年頃の友だちが一番いいのです。年下のこどもたちとばかり遊んでゐると、いつでもわがままを通

教界トピック

「創価学会、政界を暴走す」

創価学会の参院選圧勝については、すでに各分野で語り尽くされたが、いよいよ公明政治連盟と名乗って参院第三党として国会にのぞむ訳だが、此の稿の出る頃には国会において現実の動きをみせ始めているだろう。が残夏の暑氣バライにその動きに推理の焦点を合せると、先ず常任委員長の人乃至二人カク得の要求だろう。従来は僅かに辻武寿ひとりが懲罰委員長の閉職に甘んじていただけの学会であれば、今度は第三党として民社に変わって重要委員長の一人や二人は当然だと主張するだろう。例えば農林委員長を、かつて貴族院時代に農林政務次官を経験した北条しゅん八にやらせて、農村問題を中心に学会折伏を北陸・東北の農村地帯に波及させて、延び悩んでいた念仏王国の瓦解を意図する位のゲスの根性は持ち合せている筈だ。

そうとしますし、年上の子どもとばかり遊んでいると、なんでもその年上の子どものいいなりになるということもありますので、対等につきあえる同じ年頃の友達で、時には泣かされたり、又泣かしたり、けんかをしたり、仲よしになったり、いろいろの経験をつんでぐんぐんのびて行くものです。ですから友達と、どんどん遊ばせて、問題がおきたら、すぐ相談にのって、あいての立場についても十分考えさせて行くことが、社会性をのばすうえで大切なこととあります。勿論家庭内でもこどものわがままを助長するようなことはいけないこととあります。

第三は、しっかりと物ごとを考える力をつけることです。ものを覚えさせるということも大切なことではありますが、機械的にものをおぼえさせるより、正しくものを見たり、考えたりする力をつける方がもっと大切なことだと思います。いろいろなことにぶつかって、その中で自分で考え、そして段々知識をつけていくことが大切であります。

第四は、ゆたかな創造性の芽生えを育てることです。幼児期は非常に創造力がのびて来

る時ですから、うんとのぼしてやりたいと思います。絵をかかせたり、ものをつくらせたり、歌やおどりを自由表現させたいものだと思います。

こうしたことは特に幼児期において、のぼしてやりたいことで、親はこのことを頭に置いて、家庭で出来る、又しなければならぬよいしつけをして行くことが大事なことでないでしょうか。

前にも申しましたが、幼児期は性格形成の大事な時であります。よい習慣は幼児期に本当に身につけて行かねばなりません。このことが家庭教育であります。

わが国でのこどものしつけは、幼児時代には割合ゆるやかでありながら、少年時代、青年時代とこどもが成長するにつれて、きびしくする傾向があるように感じますが、これはむしろ逆の行きかたであって、幼児時代こそしつけを徹底する大切な時期であると思います。これは小さい子は、まだ何もわからずかわいそうだから、やかましいことを云わないで、だんだんわかるようになってからしつけようという気持ちから、このような態度にな

「創価学会は何んの政策も持っていない」の批判に対して公明政治連盟として発表している反論するが、これが政策かと現実の政治の俎上に適するか否かを論じなければ、確かに基本政策四項目、具体政策十九項目を発表している。

基本政策は一核兵器反対、二憲法改悪反対、三公明選挙・政界浄化、四参議院の自主性確立と極く常識的なものになっていく。ただ憲法改悪反対の態度が社会党的なものなのか、学会の持つファッショ的な意図達成を心中に潜せているのか注視されるところである。

他の具体政策にいたっては外交・経済問題は、全くでまかせな幼稚な空想を表現しているが、その根底には怖るべきものがあることを識らなければならない。例えば七項の経済統合本部（仮称）設置には「高度経済成長をめぐる論争と諸現象とを分析してみると、自由主義政策でも、社会主義的政策でも解決できない懸案が山積している。おそろく米ソ二大国家でも内面には同じように苦難をもっていることだろう。こ

るのでしょうが、よい子に育てる第一の心構

えは、幼児のころこそ、しっかりしつけをしだんだん自分で考える力が出るようになるにしたがって、少しゆるめて行くということがよいと思います。然し小さいこどもはものの道理のわからない時期ですから、一度や二度口でいってきかせたぐらいでは、こちらの思うようになるわけではないので、親の方で根気まけをしてしまっではいけません。こどもはなかなか敏感なものですから、親のいいかげんな方針で、てぬるいあつかいをしていると見ると、もうそのあとは、なにをやるうとしてもなかなかうまく行かなくなります。

それでしつけということ、何だか形式的のことにように思い、おしつけるように考える人もありますが、それは本当のしつけでなくて、幼児にはむづかしい理くつなどはわかりませんが、くり返しくり返し実際にやっているうちに身につけてくるもので、そして段々と自分自身がまわりの人たちと一しょに、たのしい生活をすすめていくために、なるほど、こうしなければならぬのだなとわかりそしてそれを、どしどし実行していけるよう

にならせるのでなければなりません。

又食事の前後に、いただきます、ごちそうさま、といっているうちに、だんだん感謝の心が芽生えて来るのであります。自分であとしまつをしっかりしているうちに、物事に責任をもつ性格がやしなわれて来ます。毎日の仏壇にお詣りすることによって人生のよろこびを感じて来るように、幼児にはしつけのよい人間をつくるというだけのねらいでなく、更にその奥に、しつけを通して育てられていく、その子の精神、人格に目あてをおいていきたいと思ひます。

しつけはくり返しくり返しやらせて習慣にまでもちこむことでありますが、そのためには親の愛情が根本であり、強い覚悟がなければなりません。こどもにとって、世の中で一番すきなお母さんが、しんそこから自分をかわいがってくれているという気持ち、自然にこどもの心に動いたときに、こどもは、少しくらいいやなことがあってもすなおによくしつけられ、育てられていくものです。然し幼児の発達程度を考えないで、むやみに無理なことをいって見てもうまくいくものではあ

れを打開し、現在を起点として調和のとれた発展を導き出すためには、政権の交代に左右されることなく、独自の長期安定政策を立案し、責任をもってその実現に努める機関を設立云云（以下略）」と発表している。この政策を読んだ人々は二十数年前のドイツにおけるナチ・日本の東条内閣、翼賛政治の姿を想い起すことだろう。『政権交代に左右されない長期安定政策』とは思統一の独裁を意味するものである。

中央公論八月号に高見順氏と学会の実質的な主脳である青年部の秋谷城永（聖教新聞編集長）渡辺城克その他との座談会が掲載されているが、ここでも「学会は決して独裁でもなければ、排他でもない。政治の上では妥協もすれば、多くの専門の人達の意見もきくと述べているかたわら、政治思想の根幹は日蓮の王仏冥会あるのみと論理の矛盾を暴露している。もつとも資本主義、社会主義、すなわち唯物でも唯心でも現代は救えない第三勢力、第三文明、色心不二の日蓮大聖上人の信仰でなければ駄目だ（池田大作会長説）は、十数年前より松本徳

りませんから、その点は十分考えなければなりません。うち中のものが気をそろえて、
“年よりつる、三文安”と云われることのな
いように、又こどもだけにしいるのでなく、
大人が一しょになって手本を示さねばなりま
せん。

このように考えると、幼児の家庭教育とい
うといかにもきゅうくつな感じがしますが、
お父さんやお母さんが、可愛いこどもを、立派
な人にしてやりたい、と思われるその気持で
こどもの生活を見守ってやればいいのです。
見ていればあぶない時にとめるでしょう。知
らないことは教えるでしょう。悪いことはし

かるでしょう。それが家庭教育というもので
す。ごく自然に、お父さんやお母さんが、よ
いこにしようと思ってこどもを育てておられ
る家庭教育であります。ですからこどもを愛
する親なら誰でも出来るものであり、又ぜひ
ともしなければなりません。

そこで最後に大事なことを一つ申し上げま
すが、それは、親はいつも世の中の進歩にお
くれないように、注意しなければならぬこ
とです。親がいいと思うとおりに、こどもを
しつければよいと申しましたが、よいと思う
ことが世間に通用しないものであつてはこま
るということであります。

ハガキ通信——

国土の浄化

私はよく汽車の御世話になる。車中は、私
にとって楽しい読書室であり、念仏の道場で
あり、また睡眠室でもある。お互に共同のお
座敷なのだ。

しかるに、周囲のきたなくなることの何と
甚だしいことか。紙くず、タバコの吸いがら

ミカンの皮、古新聞等平気でまきちらす。自
分の座敷にこのようなことをするであろう
か。野球の試合の終わった球場、花見をした後
の公園、高山平原のキャンプの跡、共同便所
駅その他公共の場所が幾度も問題になってい
る。

又その時の行儀も問題になる。家庭ではよ
き人であるのに、公共の場所では他の迷惑も
省みぬ別人となる。オリンピックを前にして

明博士の現代の社会及び世界の指導原理は
物心一如の仏教思想のみだとの主張をそっ
くり悪用されているのだ。農漁、勤労者の
税撤廃、生活保護費の倍增、都市の墓地退
去による住宅問題解決など国家経済の収支
も考えない甘餌で、ともかく十五人の議員
を生み、東京大田区では三万五千票を得て
衆議院進出の足がかりも作っている。『青
白き良識』を赤銅に燃やさなければ、日本
は逆行の地獄絵を再現させてしまふだろ
う。

七、二六 (憲)

このような現状では、四等国といわれても文
句は言えぬ。

「自らその意を浄くするは、これ諸仏の教
なり」。またわれらの願う浄土は清浄な世界で
ある。脚下を省みつつ、先ず自ら、更に人々
と共に心も身も内外周囲も浄化し、美し国大
和といわれたわが国土を清浄化しよう。

(愛知 藤井実応)

扉の御法語

内外ともにかけて、一文不通なるが、となふればかならずむまれなんと信じて、真実に欣樂して、つねに念仏申を最上の機とす。もし智慧をもて生死をはなるべくば、源空なんぞ聖道門をすてて、この浄土門におもむくべき。まさにしるべし、聖道の修行は、智慧をきはめて生死をはなれ、浄土門の修行は愚癡にかへりて極樂にむまると。

(諸門答)

ある人が上人を賞賛していいました。

「御房のお唱えになるお念仏は、その一念一念がみ仏の御意になつたものだと思ひます。何しろ当代きつての智者であり學者でありますから、經典に詳しく本願の有難さを十分に会得され、お念仏の功德についても広くご存知なのですから、御房のお念仏こそ有難いものであります」

これはお世辞というより、本心から出た感嘆の言葉であつたでしょう。しかし上人は、この言葉を聞いて、「あなたはみ仏の本願を

信ずることが不十分です」と頭からきめつけました。そして説かれました。

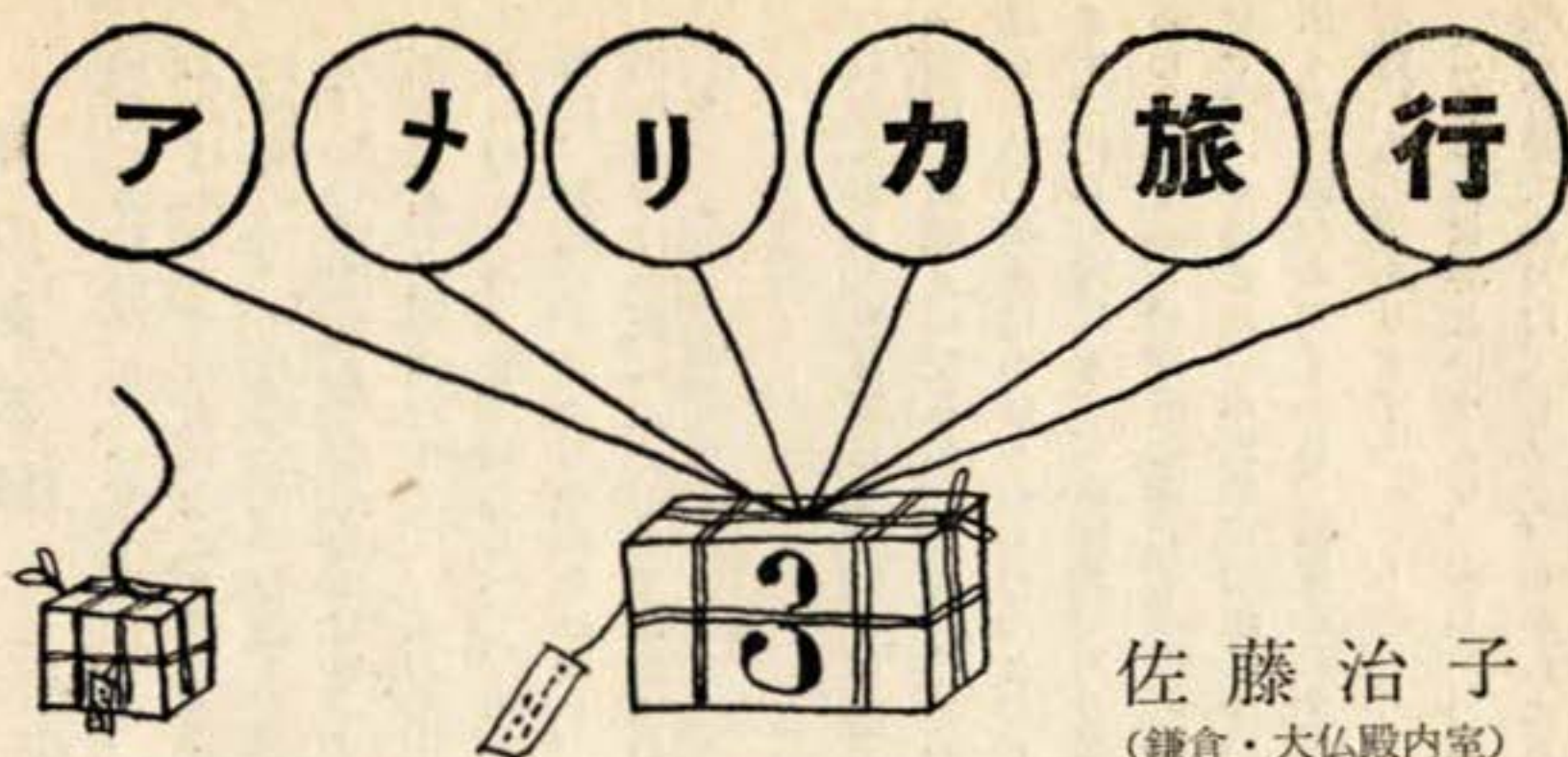
「あみださまの本願を信じて、お念仏を唱えることは、私が智者であつてもなくても関係のないことです。山奥に住む樵夫や草刈りや夏になつて水汲みを業とする人々のように、全く一文字も知らぬ者、書物を一度も読んだことのないような人々であつても、お念仏を唱えれば必ず往生できるといふ力を本願はもっているのです。このことを心の底からほんとに信じ、喜び樂しみ朝に晩にお念仏を申すことができたなら、それこそこの上のない心の働きであり、明るく楽しい生活であります。もし學問や智慧によつて裏付けられた修行を積むことによつて、この世の束縛から逃れ心の平和が保たれ、悩みや苦痛がなくなるものならば、私といえども何んで聖道門をすてることがあつたでしょうか。

聖道門の修行というのは、學問に學問を重ね、それによつてこの世の実態を見きわめて心の束縛から抜け出そうとするものです。もしこの修行ができたにしても、幾百万人に一人あるかないかの稀有のことでしょう。

それに反して浄土門の修行は、人間本来の姿そのまま、つまりどうにもならぬ愚かきにもどつてそれで理想社会の者たり得ようとするものなのです」

上人は智慧を表象する文殊菩薩の再来といわれ、あらゆる經典に精通していながら、ご自分のことを「黒白を知らざる童子の如く、是非も知らざる無智の者也」といわれました。これは決して形容詞ではなく、上人がいかに毎日の生活を真剣に送られ、深刻な反省をもたれていたかということでもあります。それと同時に「上品をねがふ事は、わが身のためにはあらず。かのくににむまれをはりて、かえりてとく衆生を化せんがためなり」とあるように、ご自分がお念仏を唱えることにあらゆる凡夫の救われることを念願してのことでありました。

愚痴の私どもがいかにお念仏を唱えても、唱えるだけで一切が救われるわけがありません。「有智無智をもえらばず、持戒破戒をもきはらず」一切の衆生を往生させようと誓われたみ仏の本願の力があるからであります。愚痴にかえつて本願を信ずるのであります。



佐藤治子

(鎌倉・大仏殿内室)

海辺にて

インディアンサンマーと云われる残暑のきびしさは日本の残暑どころではない。九月半ば過ぎから十一月中旬までの滞在予定で準備した事として着物も「お召し」程度の単衣を主に持って行った私は、麻や絹の着物のないことがくやまれた。マリオンに「だから何度薄い着物をもっていらっしゃいって注意したでしょう」って云われてしまった。行ってみなければうなづけぬすごい暑さが続いた。

二十四日の日曜日にマリオンの友人のウィルマを誘い、三人で七時おきして朝露の未だ冷え冷えとしている街を車は一路ロングアイランドへ向けて走って行った。アメリカの人達は、古い物はほとんどすて、新しい物に替へて行くと、兼々きいたり読んだりしていたものだが、二人とも海水着の上へ色のあせたスカートに、ブラウスをきて、毛布も古くなったものを車へ持ちこんだ。物を大切にする生活の一端がうかがわれる。私には海の事だから浴衣で行く様にと注意してくれた。

朝のハイウェイは静かだし、走っていても快い。住宅難はいずこも同じである。平家建の同じ型の家が沢山建てられている。暫くすると風致地区でもあろうか、電柱も古めかしい木に見せかける様にしぶい茶色にぬってあって周囲の景色をきずつけぬ様にしてあるあたりは、未だ広告板で折角の山河の美しさを害する日本を思い出さずにはいられない。

ロングアイランドはニューヨークの東にのびる一半島で所々に海水浴の出来る海辺への道しるべが立っている。若い人達の好んで行く海辺。或は黒人の人々の行く海辺であったかも知れぬ。やがてよく名前をきいてたジョンス・ビーチへついた。駐車場にも何台か来ている。車をもつおかげで誰にも気兼ねをしないかつこうで一時間以上もかかったと思われる遠い海辺へ出かけられるわけである。冷いものを売る店と、トイレットらしい建物はそのわきにあった。

毛布やジュースをとり出し、私はウィルマのお母さんの麦ワラ帽子をかぶらされて、車をおりた。真白な砂。真青な海。長い長い海岸線。処々ビーチパラソルが立てられ、ねい

すに横たわっている人や、本をよんでいる人などみ乍ら波打ぎわより少しはなれた処へ毛布を広げた。日光浴をたのしむ二人のそばで大西洋の波音に耳をそばだてる。しゃれた麦わら帽をかぶり浴衣をきて、遙かヨーロッパ大陸につづく大西洋を眺められるとは、感慨無量である。お父さんが子供の手をとって泳がせたり、ピヤダルと云った太ったお腹をしている老夫婦が、手をくんで波打ぎわを往ったり戻ったりしている風景はほほえましい静かな海辺。トランジスターを持って来ていてもあたりに迷惑をかけぬ様に静にかけている。やがて三人で波打ぎわを歩るき出した。

娘時代を思い出して乍ら、とりどりの貝をひろいひろいして歩るいて行く。足を水へつけてみる。何と冷い事だろう。暫くしてもう両手に一杯になりそうな色々の貝をもち、又元の場所へ引きかえした。足の裏をきずつける何物もない。快よい足裏の感触を楽しみ乍ら、三人ともだまって歩るいて行く。ふと足許に珍らしい貝がある。ひろったとたんにきつと大きかったにちがいない波がくずれサーとおしよせた。ファーとすそをもち上げたが

もうおそい。少しぬれてしまった。困ったーと顔を二人に向けたとたん、いつの間に水に入ったのかマリオンがはなれた処からビシリとシャッターを切った。ウィルマと二人でしめし合はせていたのだろう。シメシメと云った顔つきのウィルマ。三人で女学生にかえった様に楽しんだのである。

日本では日光浴をしない私にとっては、カンと照りつける日ざしに、少し頭がいたんで来た。日本の事も大西洋そしてアメリカ大陸の東部の一海辺などと云う事も忘れる二三時間ではあったが、なれぬ日光浴にはまいりそうだった。「もうかえりましょう」と云われた時はホッとした。気がつくとな分人がふえて来ていた。

浴衣姿の私を珍らしそうにながめる人は居てもシロシロとみない、私の方が失礼をも省みず、となりは何をする人ぞとみまわし乍ら広い砂の上を車へと戻った。

駐車場はもう一台も入るすきがない。おまわりさんが一人暑い日さかりの中を整理に立っている。マリオンがエンジンをかけると行列して待っていた先頭の一台がそこへ入るわ

けである。道路に順をまつ車が行列していた。きけば大たい良家の人達夏期は朝六時より夜十一時迄、他の季節は朝六時より夕方六時迄で、あとは海辺へ降り立つ事を禁止される由。規則にすなおな一般市民の考え方には敬意を表せずにはいられない。早く海へ入りたいであろうのに、順をまつている車の行列を左にながめ乍ら、ほてった顔や手を窓から入る風に快よく吹かれ乍ら、ブロンクスビルへと帰途についた。

グランド・セントラルステーション

ニューヨーク市内へは殆んど郊外の住人は汽車で通勤する。車を持てる国なのにと不思議に思ったが、駐車する処があっても自由に思う様に止めて置れないし、その時間をつぶす事は並大ていではない。初めて汽車への上り、ヘイゼルと言う友が車で迎えに来てくれすぐ近くの駅まで送り、車掌に私をグランドセントラル（東京駅と云った中心になる駅）まで乗せて、と切符まで買って見送ってくれた。

郊外の駅は午後は切符を売る窓口は閉めて

あつて中で買う。黒人も白人も一緒であつた。近距離の汽車は汽車電車に頼る現在の日本の方が遙かによい。二十五分程でニューヨーク市内のグラントセントラルについた。ホーム毎に出口の鉄の扉があつて、発着の時、開かれる。門で待つと云つても見当がつかないで、何度もきき返して、なぞがとけた。大きな駅である。マリオンがホームに立つてくれたし、向うも着物姿の私は探すのに手間どらなかった。

NBC放送局

ぐるぐるとビルの角々を廻り連れられて行く。RCAビルの前へ出た。そしてこの中にマリオンの勤めるNBC放送局がある。

ルームナンバーのかいてある戸を開けて入ると広い立派な部屋両側に秘書達(各重役連中の)が机をならべている。皆手を止めてニコニコと迎えてくれた。一人ずつ一番上の人の秘書から紹介される。マリオンの秘書は三番目に居た。明るい部屋でゆったりとかまえている。その奥は一番の上役と二番目の重役の大きな部屋が並んでいる。その一番の上役に

紹介され、マリオンの個室へ入った。NBCと云うと日本のNHKと同じ様な放送局で、ディレクターの肩書をもつマリオンは、日本で言えば局長級である。全米の放送網で婦人の局長級の肩書をもっているのは彼女だけである。大勢の男の中でこの役は、中々大変であつて、ニューヨークの或る銀行の副頭取も、マリオンの友人の婦人であるが、やはり婦人の地位は高いと云つても進出は婦人にとり容易ではないらしい。一休みしてから再び立つて他の部屋へ案内された。ここはマリオンの下で働く数人が机を並べている。男の人は一せいに起立。皆無言で、私が英語で挨拶した時、ボカンとした驚きの顔。「英語が出来るんだ」とつぶやいた人。おかしくなつてしまつて、その顔を思い出してはマリオンと笑つた事である。日本の着物と英語を話す事。しかも白髪まじりの私が不思議に思われたいらしい。

マリオンの上役の人からRCAのトランジスターを訪問の記念にと「御国にはソニーと云う立派なのがあるけれど、これをいらした記念にさし上げたい」と云つて下さった。頭

をさげて丁寧に御礼を云つた。アメリカ婦人達の一部で、日本婦人が年の割に若く見えるのは腰をかがめておじぎをしたり、立ったりすわったりする事がよい運動になるためではないかと云われた事がある。初対面で、特に個人的に日本人と話した事もない人には、特におじぎを忘れずにした。あちらへ行つても「我は日本人なり」と云つて日常のエチケットをのみこもうともせず、ハラハラさせられる事があると、在米の日本の方々にきかされた事もあった。アメリカのエチケットを尊重し乍ら、日本には女性としての作法もある事だし、日本婦人代表の会議に行ったわけではなくとも、あちこちで夕食会や個人の家庭のディナーに招かれ、数人の人達が御一緒にテーブルをかこむと云う時には、やはり日本人としての責任を常に感じた。握手一つにしても、男の方は婦人から手を出さないと初面の時はまごまごしてしまう。先方が大学教授のえらい方、たとえばニューヨーク大学の経済学の一人者、ドクターナドラーに御会ひした時など、先生が老学者でもあるしおじぎをするのが一番であつた。日本の経済界の或る方

もこの方を知って居るし、現アメリカ政府の経済顧問をして居られるとか云うこの老先生などには、レディスファーストの国でも、年の下の婦人から手をさし出すのは失礼と感じたのである。あちらで氣を利かせて、氣らくにさせて下さるけれど最初の印象は特に大切だといつも日本婦人の一人と云う事を意識して、挨拶をする様につとめた。

オフィスへ買物のかえりに立寄った時、そしてサヨナラを云いに行った時、男の人達も秘書の婦人達も「治子治子」と親しくなり、東洋人の私に、御茶好きとマリオンからきいて居たのであろう、秘書がお茶、クツキーを出してくれてオフィスでは異例のサーヴィスをしてくれたのである。

ここで面白い事があった。秘書達一人一人と話をしている私をマリオンが「会わせたい人が居るから部屋へ一寸来て」とよびに来た。

長い眉毛に白毛がまぢり、立派な六十位に見える男の人が私を待っていた。紹介されてから、日本の事などきかれ長々と話をした。内心「これはよほどえらい人らしい。誰なのかしら」とあまりに品のよいおじさんであっ

たので「貴方に会えて光栄です」と云おうかと思ったが止めておいて、只楽しうございましてと別れる時云って、すぐにマリオンにある人は何をしている人かとたずねた。「セールスマンよ」と云われ私はおどろいてしまった。局長級の人がセールスマンに実に友人の様にその人格を尊敬し、つきあっているのである。その人もマリオンを非常に尊敬している態度で、したがって私にも非常に親しく、丁寧である。ビジネスはビジネスであり、その仕事の合間には、同じ人間対人間として上役も下役もない。マリオンのこの態度が秘書達のあたたかいまなざしとなり遙々と日本よりの一人の客の私を迎えてくれたのであった。

私を一宗教家の妻として、その上、アメリカ人の殆んどが畏敬の念を持って知っている鎌倉の大仏の住職の妻として、丁重に扱って頂いた。アメリカでは特に仏教が非常に高くそして深く考えられている現在、私は個人的の友人訪問旅行として招かれたのではあっても、沢山の人の眼が、私をみつめている。知らず知らず日本を恥かしめてはいけない、一仏教徒として、悪い印象を植えつけてはいけ

ない、と云う責任が常に私の背に感じられたのである。仏教の話など初めから、出来ない事だからしない事は分っていたが、仏教を信ずる者の一つ一つの行動は、普通の人よりは批判の対象になりやすい。旧教の、或は新教の信者である友人の夕食会には、皆食前に祈りをする。私は頭を下げ、御仏を念じた。特に「治子をこの席に迎えて云々」の感謝の祈りには、御仏に感謝しつつも、同じ様に二三分頭を下げ、念じている私の事を、逆に尊敬してくれた由、あとで聞いた事であった。これから始まる長いドライブ旅行中、あちこちで私共を待っていていられる友人達の会合に私をシャンとさせたものは、この仏教徒の一人である。と云う責任を心深くもっていたことからであったのである。

ミュージックホール

ここへ入るのが大変である。毛皮をつけて豪華な衣裳のレディーが、ビルをとりまいて順を待っているのである。一寸日本では考えられない。それでまだすいている方であるとか。お上りさんは背の高いマリオンについて

その長蛇の列の終りに並ぶ為、チョコチョコ小走りした姿はきかざった婦人達には異様に見えたにちがいない。只毛皮をかけた婦人達の行列に驚いてしまった。日本では見られない風景であつた。こむ前にと、日曜の朝の最初のをみる為早く行つてここの行列をみたのであつた。着席して、ああここで三時間もみるのかしらと少し嫌気がさしかけていたが。

さて、幕が上ると、パイプオルガンの前奏曲。これがすばらしい。そしてショウがあり一休みもせず映画が上映される。「ティハニーで朝食を」とか云う題の映画。ショウの照明のすばらしさ。そして続けての映画。最初の一寸した行列の疲れも消し飛んでしまった三時間であつた。一度はみておきなさいと云われただけの事はあつた。

歌劇と音楽

北部への旅行中、マリオンの友人が苦心してとつておいてくれた一番のきき物、フィラデルフィアオーケストラの切符がストの為、無駄になった事は残念千万な事であつた。是非これとは思つていた二人にとり、ラジオで

演奏会が開かれなときいた時、がっかりしてしまった。

ニューヨークへフロリダ、ワシントンを経てかえつて来た二人に又その友人がメトロポリタンオペラハウスとカーネギーホールの切符とを買つておいてくれた。音楽好きの私にとマリオンの友人が並々ならぬ努力して、有意義な滞在を願うマリオンを助け努力して下さったその気持と努力に感激なしでは居られない。メトロポリタンの切符は一階席。カーネギーホールは三階席。住み慣れた商事会社の一夫人は「一階の席だとうるさいでしようよ」「三階なら本当のファンのきく処よ」と前に話されたが。メトロポリタンの一階に陣どつた人達は毛皮と宝石と豪華な衣裳の見せ場である。となりの若い男女の人が首をもたれあつてラゴエームを鑑賞中、何か後の婦人に忠告されたらしく、つとはなれた。第二幕目に、私の好きなアリア。一言マリオンに「ここ好きよ」と耳うちしたとたん「はなれて」後からしかられてしまった。その注意したまわりの人達はベチャベチャ話ばかりしている。小波の様な雑音かあちこちが聞え

る。近くに壁にそつて立見の席がある。ここへ来る人達はじみな服そうで熱心にみていた。あとでこのうるさ型の人達は特殊なグループの人達と分つた。

翌晩のカーネギーホールは一段一段と登つて行く。エレベーターがなかった。名前はかねて聞いていたし、最高の音楽の殿堂と云うべき劇場。カーネギーホールへ出演すると云えば一流であるとの事。果せるかな三階の客席の人々は水を打った様であつた。二階の特等席の人達はイブニングの盛装であつたが、歌劇、音楽愛好者の大部分は三階に陣どつてスーツ程度の服装で一、二階のはでなレデー達とはよい対照である。私には歌劇、音楽もさう乍ら、来ている人達、とりこわされると云うこの二大劇場をみせて頂けた事の方が意義が深かつた。

ニューヨークは各国各人種の集つてゐる所。その一端をこの二夜にして見たのである。

市内まで

五番街とは婦人達のほしい物だらけの高価な物を売っている店が多い。オールドリヘップ

バーンの「ティハニーで朝食を」と云う映画もここより第一シーンが始まる。町を歩いている女の人達、毛皮をかけて盛装している人、インテリらしい人、みじめな服をきてよたよた歩るいている人、各人各様であつた。サンフランシスコの町の婦人達は殆んどぜいたくな衣裳とあかぬけた婦人達の多かつたのと対照的である。

ぜいたくな店の並ぶフィフスアベニューは婦人服と男子服、それに附属した物を売る店は別々である事は大たい日本と同じで、只、一寸入りにくい点がちがう。もっとも私はお金を十分もっていないから敬遠している気持ちも手伝つての事である。ウインドー・ショッピングをして歩るいた。宝石が一だつけウインドーにかざられているのも印象的なかざり方で婦人達がみとれていた、ケネディ夫人が着られたら似合うだろうと思われるドレスを人形が着てハンドバックや宝石がサラリと私達の気持をそそる様な位置におかれてある。ハンドバックがたった一つおかれてあると目をひくものらしい。とにかく私には一寸縁の遠い店々であつた。又特別目をみはらせ

て一つずつみて歩るく気持ちもなかつた。ああこれがフィフスアベニュー、と云つた程度のものではあつた。



写真 左側がマリオン、右側がウィルマ。

ジョンスピーチにて

他の通りへ出るとガラクタ市みたいな店もある。一寸入ってみたいと云う親しみももてたが、とにかく買物は出来ぬものと、始めから分つていたこと故、食欲ならぬ買いたい欲望はさらさら起らなかつた。これは洋服を着ない私であるからであつたかも知れない。黒人の婦人達が、毛皮のすばらしい帽子等のきかさつた姿で歩るいている。原色のそのままの帽子、コート、クツでもちがった原色しかも原色そのままのいでたちで悠々と歩るいていた。

ウエスト・サイド

イタリア人の多い町並や西の方にはポルトリコの移民の住まっている一部落がある。この中に日本人の為の店があつた。何でもある。お茶、のり、漬物、オデンの材料など。案内して下さつた商事の奥さんが「よく自動車にいたずらされるのよ」と云われたので私はチョコチョコと店を出て注意を怠らなかつた。日本語と英語とで話している人も居る。何人かの日本婦人が買物に来ていた。支払いはドルである。やっぱりここはアメリカだこ

んな場所で外国に居る事を泌々味わった。

帰国してから、一月から東京で現在もまだ上映されている「ウエストサイド物語」をみた。これはその町へ足をふみ入れ、異様な町のふんい気をふと感じていた私は、是非みたいと思って五月三十一日にピカデリーへ行った。今までにない全然ちがったダイナミックな音楽の中に、これも亦今までにない（私のみた映画の中で）演出のし方である。ヘリコプターで空からニューヨークをうつし、だんだんと地上近くをうつして行く。美しいビル街。そしてパッと一道路上に、あの異様な若人のモダンバレエで現われ無言でおどり乍ら町をよたつて行く演出ぶり。市民権を持ち乍ら、よく迎えられぬうつぶんをテクニクの強いモダンバレエで表現して行くあたり。それをこの眼で一寸でもみ、感じて来た私は、一人こうふんの渦の中にまきこまれてしまった。

純すいのアメリカ人であっても、一部の若い人が町角で五六人かたまってよたつている風景を、このウエストサイドでもみたし、中流以下の人達の家が並んでいる近くの郊外の

一部落でも車の窓よりみたこともあった。反ばつして何か一つやらかして大人達をあざ笑ってやろうと云った雰囲気を感じた。見ても、見ぬふりをして通りたくなる感じを持たされるあたりは、アメリカも日本も同じである。よい面ばかりみせ様とせず、あるがままの姿で、アメリカをみせたいと云っていた

修行は幾年かかる

バツガ国の菩提王子は、釈尊からいろいろと教えを受けたが、最後に次のような問答を重ねた。

「世尊よ、仏陀を師とし、幾年修行を積んだなら、修道者となった目的を達することができましようか」

「王子よ、その前に先ず余の質問に答えなさい。王子は象を使われますか」

「世尊よ、私は象を使います」

「王子よ、たとえば人があつて、王子から象を使う術を学ぼうとする場合に、その人が熱意もなく、病気がちで、偽りが多く、怠惰で智慧もないとしたならば、その人は象を使う

マリオンの思い通り、移住して来た一部の若人のふんまんを、たとえのぞいただけではあつても、ウエストサイド物語で強く表現しているあの相こくを、心でうなづいてみられた私は、ニューヨークに自分の足をふみ入れさせてくれたマリオンに感謝せずにいられない。

術を修得するのに幾年かかるでしようか」

「世尊よ、そのような人では幾年たつても、会得できないでしよう」

「然らば王子よ、熱意もあり、健康で、偽りもなく、勤勉で、智慧もある人であるとしたら、その術を修得することができでしようか」

「世尊よ、そのうちの一つだけでもある人ならば、必ず修得できます」

「王子よ、それと同じように、もし人があつて余を師とするのに、その人が熱意を持ち、病なく、偽りなく、勤勉で、智慧を持っていれば、幾年という年月を経ずとも、一年一月、三日、いや朝に聞いて夕に、夕に聞いて朝にさとりを開くことができるでしよう」

写真の紙表

ロマンなムード

月光菩薩像 奈良 東大寺



に統一されようが関係のない行事と

なつて伝承されて行くのである。

写真の仏像は月光菩薩像と呼ばれ、奈良東大寺の三月堂に安置されている。この像は塑造で、専ら奈良時代に行われた造像法の一つである。心木に藥繩などを巻き、その上に段々とスサを混ぜた土をもりあげて像の形をこしらえたものである。内側には荒い土を、上になるに従つてしだいに精選されたこまかい壟土を用い、一番表面の土には特に仕上りの美しさをねらつて雲母の粉をまぜてある。

普通月光菩薩は日光菩薩と並んで薬師の脇侍となり、薬師三尊と呼ばれるのであるが、三月堂の月光菩薩像は独立し、造像した材質も様式や手法にも他の像とは相違がある。いつの頃か他所から移されて来たのではなからうか。そしてもとから月光菩薩といわれているものでもないような気がする。

月光菩薩という名は、誰が何時つけたのか分明でないが、実によい名前をつけたものだと感心する。美しく櫛目の通った髪を寄せ集めて真中でいわき、さらに末広がり立たせた宝髻は、下ぶくれの顔はいうにおよばず、やや肥満ぎみの体全体をきりつとひきしめ、

中半開いたうつむきかげんの目と軽く結んだ口もととは、祈りをこめてソフト胸前に合掌している麗しい姿を、にくらしいほどよく表現している。衣のひだも木像や銅像では味わえない柔らかみをもし、塑造ならではの感じを与えるが、あまりにも良く出来たせい或多或少だぶつきぎみである。しかしこのダブつきも首から胸に下げたペンダント（瓔珞）と何気なく結んだ腰紐によつてキリッとひきしまり、何処となく人間らしい親しみを感じさせると同時に、いうにいわれぬ清らかさをただよわせている。

薬師仏のかたわらで、万民の厄病を除き、解脱を進めるために祈り続ける仏像ではあるが、あまりにも美しく清らかであるために、かえつて孤独な寂しさというか冷めたさというか、ちつと表現しつくせないデリケートなものさえ感じられる。それはあたかも月の光にたとえられるロマンチックなムードをただよわせている。まさにどこまでも理想の美を求めてやまない天平彫刻の傑作の一つではあるまいか。

鈴木成元

颯田本真

大橋 俊雄

渥美湾をはるかに望む三河国幡豆郡吉田町

にりつが出生したのは弘化二年十一月二十八日のこと、父は颯田清左衛門。両親共に信仰心があつく、特に母親は胎教を重んじて、懐妊後は精進をいただき、五ヶ月の間毎日仏前で礼拝を続けられ、一日として欠かすことはなかったという。その影響をうけてかりつは幼い頃から寺の前を通る時には教えられもしないのにおじぎをし、乞食がくればお米を施すという風で、どこか常人と違った所がありいつかは出家しようと願っていた。しかし出家は長女としての彼女には容易に許されなかった。そのりつが思いをとげて得度したのは安政三年十二歳の時であり、得度の師は中山貞照院の天然和尚であった。

和尚は古今稀に見る道心者で、一意専心に清浄無垢の心で常に仏に奉仕したお慈悲の深い人であり、厳しい浄土律を日夜に策勵した。得度した彼女は名を本真と改め、叔母にあたる東城真珠庵の本乗尼の許で修行したが尼の死後四十八夜の間別時念仏を修し、その頃から何処か静かな所で一心不乱に念仏申したいと心に深く思うところあり、母親のねんごろな勧めもあって、屋敷の隅に小さな庵がしつらえられ、ここを浄土に三ヶ年不臥の誓願を立てて念仏三昧の生活に入られた。時に十八歳。この三昧生活こそは本真をして不退転の道心をあたえしめる良き機縁となった。文久二年正月再度天然和尚について戒律を学び、慶応元年から翌二年にかけて瑞松庵主実英尼に宗学を、明治十四年十二月には上洛し黒谷金戒光明寺の獅子吼観定について宗戒兩脈を相承し、これより先き小庵を徳雲寺と改め、十五年七月には本堂の再建を志した。翌年九月竣功を見るや、善光寺の誓円尼公を屈

請して入仏式を挙行されたが、偶々二十三年八月此地をおそった大海嘯に、三河地方一帯の海岸はすっかり泥海と化し、立木は悉く倒れ、農作物は勿論のこと人畜の被害も甚大であった。このさまを目にし耳にした尼は、発憤し、この人生の悲惨事に何とかあたたかい救いの手をさしのべなければと深く決意するところがあった。

以来翌二十四年の濃尾の大地震にも、二十八年五月酒田をおそった震災、二十九年六月の三陸の海嘯にも救いの手をさしのべられる尼の姿を見ないことはなく、それは大正十三年の藤沢の震災救恤まで三十四年の長きにわたってつづけられ、行脚の及ぶ所遠くは函館（明治四十年大火）から南桜島（大正三年噴火）に至るまで実に二十三県百五十余ヶ町村施物をほどこした戸数凡そ六万戸、勸化結縁された家は十万户をかぞえたという。全く尼の一生は菩薩悲願の大作であり、結縁によって念仏を通し、お浄土への旅の道連れを一人でも多くつくりたいというのが尼の念願であった。従って地震があり大火があると聞けばいても立ってもいられず、如何なる所もいと



わず遠しとせずに出かけられた。或時の如きは三河から鶴沼まで行くのに、汽車に乗れば汽車賃が勿体ないからといって、歩いて行かれ、しかも箱根越えをするには山道を行くと遠くなるからといって、トンネルを歩いてぬけられたこともあったという。トンネルを通るといふことは法規からすれば違反である。お弟子の方は「トンネルの中を歩くことは禁じられています」と申し上げると、「いや、そうしていると間に合わなくなるから、お前も馬鹿になれ、何もわからぬ、よだれたらしみたいな風をせよ、馬鹿のまねをしてい

よ」と教えられ、汽車の時間を見はからってトンネルの中を歩いたことがあった。少しのお金でも節約して困っている人に施したい。お慈悲を分ちたいという心のあらわれからであつた。関東大震災の時、尼は既に七十九歳になっていた。此頃鶴沼慈悲教庵に居られたので自からも震災にあい、建物あますところなく倒壊してしまつた。幸いに本尊阿弥陀さまのみは少しもきずつかず安泰であり、尼も不思議に九死に一生を得た。その不安と焦燥の中にも敢然と立上がり、建物の下から取り出した蒲団をおしげもなく罹災者にほどきされ、遂に尼は着更えさえ持たぬ身となつた。それでも困っている人を見れば、じつとして居られず「わしの着たものですまんがのう」といっては嬉しそうに差しあげ、一寸寺を出る時にもお菓子やらお金を懷中にし、帰りはなくなっているのが常であつた。

一日二食全くの菜食主義者であり、木綿以外のものは決して身につけず、財産とてなかつた。弟子の或尼が「こんな事を申し上げたら不思議に思ひでございましょうが、お寺には財産とてありません。こうしてお師匠様

が物を施しておりますけれど、決して困るようなことはありません。きつと又みたされて参ります。ほんとに不思議でございます」と語つたという。無一物が寺院本来の姿であり無一物になつたからとて「決して困るようなことはない」自然にまたみたされてくるという所に尼の偉大な感化力——陰徳のあつたことを忘れてはならない。老尼に私淑していた大島徹水は何時であつたか、念仏申す人多い中にも好相感見した人は「僧侶としては山下現有上人と戒誓上人ぐらいでしょう。尼僧では慈本尼と本真尼、その外在家の人では阪根弥兵衛翁等を挙げることでございましょう」と語っていた。その得難い念仏者の中に本真尼がいたのである。老尼は南無阿弥陀仏と一語一語はつきりと念仏すべきことを勧められ、いい加減に申されることは厳に誠められた。

かくて一生を念仏勸化と財法二施に捧げた尼も昭和三年八月八日徳雲寺から浄土に帰られ、火葬にふされた際には舍利二粒が出現されたという。法名を円明本真沙弥尼といい、弟子は百人にんなんとし生前は「三河の尼様」として其の徳を慕う者が少くなかつた。

浄土宗入門

その二

浄土教の流れ

戸松啓真

(大正大学助教授)

前回は浄土教もまた仏教であるという大局的見地に立つことが、浄土教の正しい理解を深めるのに大切であるということのをべたのであるが、今回はそれを歴史についてのべたいと思う。それはちょうど人類の歴史をたずねるに、その先史時代から始めるようなものである。

浄土教が浄土宗として独立の宗派となったのは法然上人以来のことであるが、その信仰の源は相当古いのである。釈尊が三十五才で成道されて以来、折にふれて説法されたが、自らは一卷の經典をも書き残されなかった。

それはキリストも同じである。しかし滅後すぐに釈尊の教えを正しく伝えるため、それを編纂しようという結果が迦葉、阿難を中心に行われ、更に滅後百年頃にも第二の結果が行われたと伝えられる。この頃主として戒律に対する意見の相異から、進歩的な教団と保守的な教団に分れ、これが更に分裂して部派仏教時代となったのである。後世小乗仏教というのはこれをいうのであるが、その後約五百年をへた頃、進歩的な部派仏教の系統から、その思想を基盤としてそれにいろいろな要素が加わって大乘仏教が興り、紀元二世紀頃ま

では初期の大乘經典として般若經典、法華經、華嚴經、浄土經典、密教經典などが成立したのである。その後、竜樹、世親などが出て大乘仏教が次第に盛んになり、七世紀頃まで大乘仏教時代が続いたといわれる。そしてこの間、多数にのぼる大乘經典が成立したが、八世紀の中国の天台僧であつたけいけいたんねん荆溪湛然が、その著に「諸經の讚するところ多く弥陀にあり」と書いているように、經典の中に阿弥陀仏や極樂浄土についてのべているものが多いのである。望月信亨博士は現存の大藏經のうち、大乘經典についてみると約三分の一が弥

陀や浄土についてふれているというほどである。このことは、經典の成立した印度や、經典が中国に伝来される経路になった西域即ち中央アジアに於て、古くから広い範囲にわたって弥陀浄土の信仰が伝播していたことを物語るものであろう。

法然上人は浄土宗を開くにあたって、大乘經典の中からそのよりどころとなる經典として無量寿經、觀無量寿經、阿弥陀經のいわゆる「浄土三部經」を選んだのである。従って浄土宗の源は、この三部經の成立前後にあるといえるのであるが、その成立の年時については明治以来多くの学者によってすぐれた研究がなされて、およその推定がなされるようになった。即ち初期の阿弥陀經典として紀元二世紀頃までに成立したものは、般舟三昧經、阿弥陀經、無量寿經などであるが、觀無量寿經の成立についてはいろいろ問題があり、以上の經典より後にその影響を受けて成立したものと思われる。

浄土宗の信仰に入らんとする者は、先ずなれといつても、所依の經典である浄土三部經を縦横に味読することが大切である。その中

には弥陀信仰の全てがあり、人間の優劣に係なく十方衆生を救済せんという阿弥陀仏の本願慈悲を感得するのである。法然上人は、「聖道の一門をさしおきて、浄土の一門に入らんとおもわん人は、道綽善導の積をもて所依の三部經を習ふべきなり。」¹往生大要鈔Vと示されている。後世からみると浄土宗独立宣言書ともいうべき法然上人の「選択本願念仏集」²一卷も法然上人が、自分の独断ではなく、祖師と仰ぐ道綽や善導そのほかの方々の三部經註釈書（安樂集、觀經疏など）を手がかりにして、三部經をどのように受取られ、そしてそこからどのようなにして本願の念仏を選択されたかといういわば法然上人の三部經觀、または三部經私釈ともいえるのである。

浄土宗を立てるにあたって法然上人が心を用いたことは、自分が勝手に宗をたてたのではなく、他の聖道諸宗と同じように師資相承血脉の譜があるということであった。これは浄土教の系譜ともいえるものであり、選択集のはじめにのべられている。

次に印度、中国、日本と三国にわたって、法然上人が浄土宗を開かれるまでに、それぞ

れ浄土信仰を持ち法然上人が祖師とされた方々について略説する。いわば浄土宗の前史ともいふべきものである。

印度に於て最初に浄土信仰を持った歴史上の人は、二世紀から三世紀にかけて出世した竜樹である。竜樹は大乗仏教特に般若の思想を大成したすぐれた学僧であるが、般若經を註解した「大智度論」には、しばしば弥陀經典を引き弥陀浄土のことがのべられている。

また「十住毘婆沙論」³には、釈迦の教えを難行道と易行道に分け、阿弥陀仏の各を称えれば、現世に於ては不退を得、死後に極樂に生れることを説いている。次に四・五世紀頃の人として世親をあげなければならない。世親は唯識学の大成者であるが、その著「往生論」に説かれる浄土信仰によって、浄土教祖師にあげられるのである。「往生論」には浄土に往生するための五つの方法即ち五念門が説かれている。特に大事なことは、法然上人が「往生論」を三經一論といって、浄土宗正所依の論にあげられ、三部經につぐ重要な書とされたことである。後の浄土思想発展に大きな影響を与えたものである。

印度に於ける經論類が西域を通過して中国に伝訳されたのは三世紀頃からであり、阿彌陀仏信仰に関する經論類が漢訳されるにつれて淨土教の著作や実行者が多くあらわれた。それについては選択集にもべられているが、今は中国の淨土教の系譜の中から、淨土宗に直接関係のある祖師として、曇鸞と善導をあげることができる。

先ず曇鸞である。曇鸞は五世紀から六世紀の半頃にかけての祖師で、洛陽に於て印度から来た菩提流支に会い淨土の經論を得て西方願生者になったと伝える。その著「往生論註」は、世親の「往生論」の註解であるが、淨土宗に於ては三部經、往生論と共に重要な宗典とされている。曇鸞は竜樹、世親の二人の思想を受けつぎ、後の淨土教の根本思想を一段とはっきりさせている。即ち竜樹のように仏の名を称えることを説いているが、それは諸仏の名ではなく、彌陀一仏の名を称えることであり、現世に不退を得るのではなく、往生以後に不退を得るとし来世後生がはつきりしてきた。また念仏往生の根拠は阿彌陀仏の本願他力によることを明らかにしている。主

として論註にとかれた曇鸞の教えは道綽をへて、唐の善導に至って大成されたのである。

善導は曇鸞よりも五十年後に出て、道綽より直接に法を受けた。その特色とすることは時機相応の教えとして念仏は称名であることを唱えた。ここに淨土教は、仏教史の中に於て時代と人との相応した他力易行淨土門となつたのである。その著書は「五部九卷」といわれ、これもまた淨土宗の重要な宗典とされる。五部九卷というのは「觀經疏四卷」「觀念法門一卷」「法事讃二卷」「往生礼讃一卷」「般舟讃一卷」であるが、そのうちとくに「觀經疏」は法然上人が淨土宗を開く契機となつた「一心専念」の文句があるものである。四十三才で専修念仏に帰した法然上人は年をへると共に善導に対する帰依心が強くなつていったようである。六十六才の時に著わした選択集の最後の章にも、彌陀に対すると同じような心情が吐露されている。

日本に淨土教の經典類が伝来したのは、六世紀半頃の仏教公伝からそう遠くない時期と思われる。既に七世紀半ばの飛鳥時代には、宮中に於て無量寿經が講ぜられており、今日

伝えられる奈良時代の写經類の中には、淨土三部經や道綽善導、などの論書があつたという。このことは、淨土宗以前に奈良や比叡山や高野山の仏教の中にも淨土信仰を持った僧侶がいたことを知るのである。その代表的な人々をあげると、南都系の淨土教者には、智光、礼光をはじめ永観、珍海等があり、真言系には覺鑊、靜遍が出た。しかし後の淨土宗の母胎となつたのは比叡山を中心とする天台の淨土教であつた。慈覺大師円仁をはじめ良源、恵心、良忍等が出たが、なかでも日本淨土教發展史上重要な位置をしめるのが恵心である。その著「往生要集」には、善導の觀經疏、往生礼讃觀念法門や道綽の安樂集も引かれ、とくに善導の淨土教がこの書によって次第に流布され、觀念の念仏から口称念仏へと展開して行く動機になつたのである。法然上人はこの往生要集を指南先達とされ、やがでそれらの流れの中から専修念仏の淨土宗を開く確信を体得されるのである。

x

x

浄土の会員を一人でも多く

◆どなたでも会員になれます。

◆会費は年額六〇〇円（送料共）です。

◆会員には毎月「浄土」を配布いたします。

◆この会員は皆様の会ですから、その発展の為にも一人でも多くの会員をつくって、正しい信仰運動をひろめましょう。

お知合いの方には是非おすすすめ下さい。

◆お申し込は振替（東京八二一八七番）を御利用下さい。

東京都千代田区飯田町一―二一

法然上人鑽仰会

「浄土」講読規定

一部 定価 金五十円

（送料 六円）

会費一力年 金六〇〇円

（送料 不要）

浄土 九月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便認可

昭和三十七年八月廿五日 印刷

昭和三十七年九月一日 発行

定価 五十円

編集人 村瀬秀雄

発行人 佐藤密雄

印刷人 関二三男

印刷所 新光社印刷株式

会社

東京都飯田町一―二一

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京三三二局五九四四番

振替東京八二一八七番

浄土トラクト

村瀬秀雄著

月影抄

御法語の栞り

本誌「扉の御法語」として毎月執筆中のなかから著者が七篇を選んで解説を付して新らたに浄土トラクトの一編として刊行

目次

- 一、上人のご日常（われ聖教を見ざる日なし）
- 二、浄土宗の意義（われ浄土宗をたつる心は）
- 三、道を求む（かくの如くして昨日もいたづらに暮れぬ）
- 四、決定の信（我は烏帽子もきぬ法然房也）
- 五、弥陀名号の功德（無礙光とは）
- 六、信仰のすがた（つみは十悪五逆のものも）
- 七、念仏を勧める（不軽大士の杖木瓦石を）
- 八、あとがき

東京都千代田区飯田町一ノ二一

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

B 6 版	十六頁
定価	十五円
送料	十円
二十部以上五分引	
五十部以上一割引	
百部以上一・五割引	

日本一の生産・設備

梵鐘 (45cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (12cm~51cm)

音響物理学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展参事香取正彦先生
芸術院賞受賞



鑄物師 老子次右衛門

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分（梅田新道大映横東へ一丁右側）

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪 340 8847番 本社工場 高岡市横田